

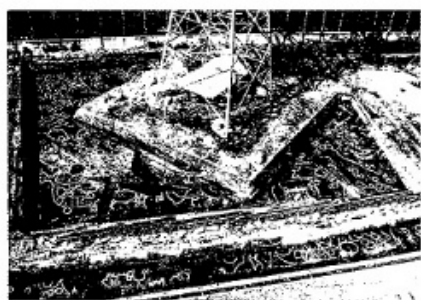


前回紹介した旧鍋田川の流路を走る市道と古堤街道の交差点から、再び街道を東へ向かいます。ここからは中垣内地区です。250メートルほど進むと、左手に大阪桐蔭高校の校舎が見え、正面には昭和40年代に開通した大阪外環状線が南北に走ります。外環状線を横断し、さらに100メートルほど進むと、右手に関西電力東大阪変電所が見えてきますが、この付近は弥生時代の集落跡である中垣内遺跡として知られています。

昭和34年（1959）、変電所の建設工事中に弥生時代の遺物が発見され、急ぎよ発掘調査が行われました。大量の土器や磨製石斧、石包丁、打製石鏃（矢じり）、木製の鏝、動物の骨などの遺物が出土したことから、ここが弥生時代前期（今から約2300年前）の集落だったことが分かりました。今から約6千年前の縄文時代、海水面の上昇によって大阪平野は生駒山地の山際まで水没しましたが、弥生時代前期頃になると、河川などの堆積作用により次第に水境が後退し、稲作に適した水辺の低湿地に集落ができるようになりま

生時代の遺跡になったかもしれませんが、中垣内遺跡では、昭和60年代以降、変電所や北側の大阪産業大学、東側の市民体育館の敷地などで10回以上発掘調査が行われ、古墳時代の集落跡も確認されています。今後もここ中垣内遺跡からは、大東市のルーツを知る重要な手がかりが見つかることが期待されています。

（生涯学習課）



中垣内遺跡の発掘調査の様子（平成4年）



出土した弥生土器



古堤街道を挟んで、関西電力東大阪変電所のすぐ北には中垣内浜公園があります。面積は15ヘクタールで、普段は市民の憩いの場や運動広場として利用されており、近い将来、かまどベンチや備蓄倉庫などを備えた防災拠点として整備されることになっています。公園の名称にもなっている中垣内浜は、約300年前まで深野池に面していた中垣内村の西端（現在の中垣内7丁目付近）の地名でした。そのため、今でも地元では古堤街道を「浜道」と呼んでいます。

中垣内浜公園では、毎年1月14日に「大とんど」が行われます。とんどとは、一年の無病息災を願うため、小正月（1月15日前後）に各地で行われている火祭りです。地域によっては「ドンドン焼き」や「左義長」ともいいます。中垣内のとんどは、やぐらの高さが10メートル以上もあり、市周辺では最大の規模を誇ります。やぐらの組立作業は、当日の朝8時ごろから始まります。竹やわらで骨組みを行い、その中にヒバを挿し込んで形を整えます。竹やヒバは直前の日曜日に地元の人から山で切り出したものを、わらはは農家から譲り受けた桶わらを用います。午後4時ごろ、やぐらが組み上がると、各家庭から持ち寄った正月の松飾りやしめ縄などが中に放り込まれます。夜になると、地元

に着くと、やぐらに作られた鳥居に参拝し、8時に提灯の火で一斉に点火します。巨大なやぐらは赤々と高く燃え上がり、竹のはじける音が威勢よく鳴り響きます。かつては焼けて真っ黒になった炭を持ち帰り、小豆粥を炊くかまどの火種にしていた家もあったそうです。

（生涯学習課）



赤々と燃え上がるやぐら



組み上がったやぐら